



日本ポツチャリ党



好きです、ポツチャリ！

美音羅

ボンジョビとバレンタインキッス

バレンタインデーの数日前、本棚を整理していたら、私が学生時代に夢中になった、アメリカを代表するロックバンド「ボンジョビ」のDVDが出てきた。

「懐かしいなあ〜」

そう思いパソコンでそのDVDを見ていたら、嫁が隣でテレビを見始めた。

「普通・・・俺がDVD見てる横でテレビつけるかぁ？・・・」

思いながらも我慢していたが、どうしてもテレビの音に邪魔されて集中できない。テレビはバレンタインデー特集だったようで、色々なチョコを紹介している。もう仕方がなかったのでDVDの音を消し、画像だけを見ていた。若かりし頃の「ボンジョビ」は、金髪を振り乱し、激しく熱唱している。すると、テレビから

「バ、レン、タイン、デ〜↑キッス♪」

日本屈指の脳天気な音楽が流れ始めた。言うまでもないが、国生さゆりさんの歌う「バレンタインキッス」だ。

そんな音に関係なく、私は音の出ていない「ボンジョビ」のDVDに集中する。ボンジョビは、大観衆を前にギタリストと肩を組み、絶叫している。しかし、横のテレビは

「バ、レン、タイン、デ〜↑キッス♪」

「バ、レン、タイン、デ〜↑キッス♪」

連続してその部分だけ繰り返していた。その音楽を聴きながら「ボンジョビ」のDVDを見ていると、不思議なことだがだんだんまるで、「ボンジョビ」が「バレンタインキッス」を歌っているように見えてきて、とんでもなく可笑しくなってきた。

「バ、レン、タイン、デ〜↑キッス♪」

「バ、レン、タイン、デ〜↑キッス♪」

その音にあわせ、ステージ上を激しく歌い狂う、「ボンジョビ」。(笑)
熱狂する、観客。(笑)

ボンジョビは最後。
ステージ上にひざまずき、
スポットライトを浴びながらゆっくりと天を指差し、
感動的に・・・・果てた。

「バレン タイン デ〜↑キイツ〜ス♪」

唄いながら。(笑)

女性の謙遜『プラスマイナスゼロ』

「○○さんって、きれいだよね」

女性に向かってそう言うと、

「いえいえそんな。私なんて・・・」

言って微笑みながらうつむき、顔の前で小さく手を振って否定するのが美しい「謙遜」のあり方だと思うが、私と同年代（30代後半）の女性は違う。

「きれいだよね」

言うと、決まって

「ウフッ」

決して否定しない。（笑）

でも、最近の女性の多くがそうだと思う。

だが。

自分の美しさに謙遜はしなくても、自分の彼氏となると謙遜を忘れない。彼氏のことを褒めたりすると、決まって謙遜する。

「○○さんの彼氏、イケメンだよね」

「いえいえ。そんなことはないですよ～」

満面の笑みで言ったりする。（笑）

ただ、謙遜の仕方人もそれぞれで、彼氏のことを褒められると座りが悪いのか

「○○さんの彼氏、イケメンだよね」

言うと

「ええ、確かにイケメンだとは思いますが・・・」

でも・・・背が低いんですよ」

『プラスマイナスゼロ』の謙遜をする人がいる。（笑）

「カッコイイよね」「優しそうだよね」を謙遜するために

「でも、家事は何もしないんです」

「でも、服の趣味悪いんです」

「でも、休みの日は歯を磨かないんです」

いろんな要素を持ち出し、

『プラスマイナスゼロ』にして、謙遜する。

今日の夕方。

驚愕の『プラスマイナスゼロ』の謙遜をする女性に出会った。

私が喫茶店で休憩していると、

隣に座った20代後半の女性二人組が彼氏の話に花を咲かせていて、

なんとなく聞いていると、

「・・・でもさ。奈緒美の彼氏はカッコイイよね」

「うん。背も高いし、私もカッコいいと思う・・・でもね」

「??・・・でも??」

「うん・・・でもね。彼、かっこいいんだけど・・・」

痔なの」

隣で飲んでた紅茶が鼻から出そうなほどに驚いた。（笑）

そんなこと言わなくてもいいんじゃないか？

そして。

痔じゃ悪いか??（笑）

心配して隣りを見るが、二人とも、真顔だ。

そして。

それを聞いた女性の答えはもはや、間違っていると思う。

「え？奈緒美の彼氏、痔なの？

・・・イボ？」

気になるか？（笑）

ゴルゴの流す、美しい涙

ゴルゴに狙われたら、まず、助からない。

ゴルゴは国際的なスナイパーで、暗殺者。

狙った獲物は決して外さず、過去には依頼者の求めに応じ、

特殊精鋭部隊2000人を、列車ごと氷点下の海に沈め、一気に殺した経験を持つ。

その殺しのテクニックは、絶対的だ。

そして、そんなゴルゴには一つ特徴的な性質があって、それは。

「彼の背後に立ってはならない」

ということだ。

彼は、背後に気配を感じると反射的に殴り飛ばす。

体が勝手に動くのだという。

命が惜しければ、彼の背後に立ってはならない。

私の妄想は、ここから始まる。

.....

スイスのとある高原で、ゴルゴは小屋の陰から、銃を構えていた。

ゴルゴはある組織から、巨大テロ組織の首謀者暗殺を依頼されたのだ。

彼のたてる計画には失敗がない。

今回も、ターゲットが車から降りたその瞬間、彼の弾丸が標的の頭を貫通するだろう。

そして仕事は難なく成功し、15時きっかり。

スイス銀行へ莫大な報奨金が振り込まれるのだ。

淡々と銃を構え、首謀者の到着を待つ、ゴルゴ。

しかしその時。

突然一人の少女の声がゴルゴの背後で聞こえる。

「みんな・・・見て！！・・・クララが、クララが立った！！」

反応する、ゴルゴ。

青いお洋服を着た色白少女を、一撃、無意識に殴りつける、ゴルゴ。

そして、大きいお空を、舞うように吹っ飛ばす、クララ。

やっと立ったクララが、スイスの美しい高原に即死状態で横たわったところへ、

ハイジが駆け寄り、クララへ泣きつく。

そして、ゴルゴに向かって大きい声で、叫ぶ。

「ゴルゴのバカ！！・・・ゴルゴの意気地なし！！

クララに・・・背後に立たれたからって、何よ！！

ゴルゴなんて・・・ゴルゴなんて・・・死んじゃえばいいんだわ！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

ハイジは、ペーターとおじいさんとでクララの亡骸を抱えて帰り、
ゴルゴはそれでも・・・・・・・・無事に任務を遂行した。

そしてその晩。

ゴルゴはホテルのお布団に入ってうつぶせになって嗚咽する。

「う、うお、お、おおおおおおおおおおおおおお！！」

その時の

ゴルゴの流す涙は、美しい・・・・・・・・のか？（笑）

・・

ただ今真夜中なのですが、私の頭の中。なぜだか。

ハイジとクララとゴルゴが手をつなぎ、

とても楽しそうに輪になって踊り、眠れないので、文章にして吐き出しました。

お願い。もう寝かせて。（涙）

昨日の晩遅く。

疲れ切り、立って寝そうになりながら混雑した電車に乗っていると、私の2、3人向こうで、自分のことを「アキコ」と呼ぶ、20代後半のOLが、同じ会社の同期と思われる女性と大きな声で話していた。

「アキコね、三十にもなって、
『あたし人見知りなのよ』
って平気で言えちゃう人は、成長がなくて、許せないと思うの」

なんだかめんどくさい話だなあ、と思ったが、かなりの力説っぷりで、ちらっと顔を盗み見たら、原田知世似のきれいな女性だった。話を聞いている同期の女性も、これまた小泉今日子似で美しい。

「働いてりゃそんな不満もあるだろうけどさ・・・」

と思いながら、話を聞くともなく聞いていたが、一向に終わる気配がなく、会社の特定女性に怒りの矛先を向けている2人のボルテージは、徐々に上がってきている。しばらくすると、車内にも、二人の話題にうんざりした空気が充満した。そろそろ誰かが

「もう少し静かにしてもらえませんか」

と言うべきだと感じ、私自身、全くでしゃばった性格ではないが、なんならそれを私が言ってやってもいい、とさえ思った。そんなうるささだった。

するとそのアキコが、何を思ったのか大きな声のままに

「ところでさ、サンマって、川にいるよね」

と何の脈絡もなく言い放った。思わず、みんながアキコの顔を見た。絵に描いたような、「びっくりした空気」がそこに生まれた。

「・・・あんな、サンマは海だろうよ・・・」(心の声)

アキコを見る皆の視線が、「うざい」から「気の毒」に変化しようとしているその時、小泉今日子似が、思わぬことを言う。

「そうだね、、、川だな」

「・・・だな、だとお？」(心の声2)

小泉今日子似・・・お前さん、アキコより言い切ってどうする！

二人を取り巻く空気が激変し、周囲は二人を中心としてドアにへばりつかんばかりに引いたように見えた。

小泉今日子似は、

聞き分けがいい性格なのか？

それとも、根が優しくて、アキコの間違いを温かい目で見守っているのか？

それとも、「サンマは川です」と同調しておかなくては、

アキコに殺られる何らかの事情があるのか・・・。

それとも・・・やっぱり・・・トンチンカンなのか？

そこまで考えた時、アキコが口を開き、

「アキコね、魚の中ではサンマが一番好きだな」

「へえ、そうなんだ、おいしいしね」

で、会話がまた、会社の愚痴に戻った。

「・・・なんなんだ？

アキコよ、なぜ、サンマの話を、した？」(心の声3)

その後も、二人は周囲に迷惑を撒き散らす大きな声で持論を展開していましたが、周囲に彼女達の話の気にかかるものは、もういなくなったようで、私ももう、二人を諷めようとは思いませんでした。

大胆な間違いは、周囲の苛立ちを削ぐための、巧妙な手口・・・
だったのか？

4月の話。

年度末も明けて一段落。

大学時代の友人とサシで飲む機会があった。

学生時代を思い出しながら、散々飲んで目茶目茶だったのだが、

最初、銀行勤めをするその友人の反応がイマイチ悪い。

何を言っても上の空といった感じで、話が深くまで入っていかない。

「・・・どうしたんだい？今日はなんだか元気なさそうだけど。

銀行で、何かあったのかい？」

「いや、銀行は大丈夫。

・・・美音羅、実はな、俺、好きな人がいるんだ」

「へー・・・40歳で恋煩い??」

「いや・・・お前。絶対笑うなよ。」

「へ?・・・爆笑を伴う恋煩い？ひょっとして俺の知り合い？」

「いや、そうじゃない。そうじゃないんだけど・・・

実は俺な・・・今、

柳原可奈子が好きで好きでどうしようもないんだよ。」

それを聞いてひとしきり笑った私が友人に頭を叩かれた後、

「いや、でもお前は学生時代から変わらないね。

俺はこの世の中でお前ほどポッチャリ好きな男を見たことがないよ。

やっぱりいまだにポッチャリを追い求めるか？」

「ああ、好きだね。

あの、骨格が分からなくなるほどの肉づきがたまらない。」

彼のポッチャリ好きは周囲がびっくりするほどで、

大学時代に公言していた「好きなタイプ」は

「手が、クリームパンみたいな人」だった。（笑）

「柳原可奈子の、あのポッチャリ特有の、横柄さもまたいいんだよね」

「（笑）」

「あんまり動かないのも、ツボ」

「（笑）」

「今度一緒に柳原可奈子のステージ見に行かない？」

その誘いを軽く断った後、話題は彼の奥さんの話になる。

「でも、お前の奥さんもかなりポッチャリだったよね。元気？」

「ああ、元気だよ。今もポッチャリしてて恰幅がいいよ。

最近、顔が『白鵬』に似てきてね」

「白鵬って……横綱の??（笑）」

「うん。でも、可愛くない？白鵬。」

「白鵬?（笑）確かに可愛いけどね、白鵬。

でもさ、『嫁が白鵬』って……どうなの??

あんまり言わないほうがいいんじゃないか？」

「ええ???ダメか?白鵬……俺には妻は一つの完成形だけど?」

「いや、否定する気はないけど……

でも、う——ん……さすがだね……。 (苦笑)

でもさ、親友だからあえて言わせてもらうけど、

俺……白鵬は抱けない。」

「美音羅……お前は馬鹿か？」

誰が実際の白鵬との夜を考えろっていったよ（笑）

それに第一、顔だけ白鵬なんだよ？

毎日家に帰って横綱の白鵬がいたら俺だってイヤだよ（笑）

相撲部屋じゃあるまいし」

「（笑）」

「（笑）」

「でも、お前の奥さん、結婚式の時に初めて見たけど、

みんなひっくり返るほどだったよ。

あれだけ大きくて可愛い人、俺、初めて見た。」

「まあな。妻には悪いことしたんじゃないかと思うけど、

俺、結婚の一週間くらい前から妻に無理矢理食べさせたもん。」

「ええ???（笑）お前、そんなことしてたの?（笑）……ちゃんこ?」

「美音羅……さすがに『ちゃんこ』はねえよ。（笑）でも、

『頼むからぎりぎりまで太ってくれ』って言ったよ。

今でも一緒に笑うけど（笑）」

「（笑）」

「男にはあんまりマリッジブルーってないって言うけど、

今考えれば俺には少しあったのかなあ。

妻に向かって『喰えっ!喰えっ!』って散々言ってたような気がする」

「それって、ある意味DVなんじゃない?（笑）」

「・・・だったかもしれない（笑）」

「で。式で一番盛り上がったのが、お前が彼女をお姫様抱っこした時で」

「ああ（笑）あれは俺も気合入れたね。」

「会場が、どよめいたからなあ。」

「あの時参考にしたのが重量挙げの力の入れ方で、

足を、前後にして荷重を分散させながら持ち上げたからね」

「そうだったそうだった。（笑）」

奥さんの体が、周囲の歓声と同時に徐々に上がっていったからね。

みんなが『一気にそのまま頭上まで行けっ！！』って叫んだからな。（笑）」

「上まではさすがに無理だよ。競技じゃないんだから。（笑）」

でも、あれは嫁も喜んでたよ。

本人、『まさか私の体をね』って言ってたくらいだから」

「マジ？」

「うん。マジ。・・・俺なりの、サプライズ」

「（笑）」

そんなこんなで、不景気を吹き飛ばすような楽しい話で長時間を語り合い、最後。

「まあ、柳原可奈子が好きでどうしようもないってお前の話聞いて、俺、今日少し嬉しかったよ。なんだか、懐かしかった。」

感想を述べて、楽しい飲み会は終わった。



柳原可奈子さん



横綱 白鵬